

# 中北.com

地域教育情報紙

中北教育事務所  
地域教育支援スタッフ

no.

# 4

TEL 0551-23-3046

FAX 0551-23-3013

チュウホクドットコム

中北の地域社会 (COMmunity)の心の交流 (COMmunication)をめざします

## 峡中・峡北地区 地域教育フォーラム 開催

9月20日(木)、南アルプス市の櫛形あやめホールにおいて、峡中・峡北地区地域教育フォーラム(第2回峡中・峡北地区地域教育推進連絡協議会)が開催されました。当日はあいにくの雨でしたが、事前の申込者を上回る約400名もの参加がありました。

会場及び主催者を代表して、峡中地区の田中正清会長(中央市教育長)が挨拶したあと、信州大学医学部教授 本田秀夫氏による講演が行われました。以下は講演の概要です。



開会行事



峡中地区 田中正清会長

### 講演：「ライフステージに応じた発達障害の理解と支援」

信州大学医学部 子どものこころの発達医学教室教授

附属病院子どものこころ診療部長 本田 秀夫 氏

#### ◆ はじめに ◆

発達障害の子の育ち方は、一般の子の育ち方とは違うことを理解することが必要。周りの子たちは普通の子で、その中に混ざって刺激を受けたとしても、発達障害の特徴がなくなるわけではない。だから、発達障害の特徴を持っている子たちが、どんな育ち方をするのかをわかっていることが大切。

#### ◆ 「信頼」が土台 ◆

一般的な子は、乳幼児期に、母親との「愛着」をベースに信頼関係や安心感が形成される。さらに、それをベースにいろいろなものが学べるので、「愛着」をしっかり作っていかないとその土台がないという危険性がある。自閉スペクトラムの子は、「愛着」が土台ではない。「愛着」は途中から出てくるもの。自閉スペクトラムの子の土台は、「信頼」である。「愛着」と「信頼」は微妙に違う。「愛着」というのは愛情を感じる。「信頼」というのは法則がしっかりあるということ。大事なものは、本人たちが安心して、過ごせる、信頼できる関係を小さいときにどうやって作るかということ。





## ◆ 身につく順番の違い ◆

発達障害の子は信頼（法則）が大事な人たちなので、正義感や、ルールが先に身につく。後から他の人を思いやるという気持ちが出てくる。一般の子は、他の子と共感したり、思いやりを持ったりするという感情が先で、後で理屈が形成される。一見すると、他の子と比べ、成長の仕方がちぐはぐしている。その違いを理解することが大切。そこをうまく支えていくと、結果として大人になる頃までには、ほぼまじめで信頼を置ける人になる。自分自身でも、言動が矛盾せず、信念を持って一貫していることから、信用される人間に育っていく。協調しようという気持ちも身につくが、誰かのためにとか、直感的に人の気持ちがわかるとかが難しいので、理屈としては筋が通っているけど、ちょっと相手の気持ちを逆なでするとするような言動が見られる。

## ◆ 「特性特異的な育て方」が理想 ◆

特性に応じた育て方。本人の特性に合わせて、興味の持てることはしっかりとやらせる。あと、少し努力したらすぐに身につくようなことをしっかり教えていく。逆に興味のないことやあまり得意じゃないことは無理強いしないという育て方。他の人に気軽に相談できる環境があることも重要。そういう環境に育つと精神的に安定し、得意な面が伸びる。苦手領域は、強要されなければ、強い苦手意識がなくてすむ。これが理想的な育て方。



## ◆ 1 幼児期から小学生くらいまで ◆

この時期の発達障害の人の育て方が、普通の子と違うことをしっかり認識することが重要。まず、一般の子育て法とか発達理論を無視すること。なぜなら、子育て理論というのは発達心理学をもとに作られているが、発達心理学は、すべての子どもがある時期からこれができるということを言っていない。平均値としているだけ。当然平均からある程度外れる人もいる。大事なのは、発達の多様性ということ。一人一人違うということ。

発達障害の子どもには、ヴィゴツキー（ベラルーシ出身、旧ソビエト連邦の心理学者）の「発達の最近接領域」も大事。「発達の最近接領域」とは、少し教えたら学ぶことができる、身につけることができる、逆に、教えられないとなかなか身につかないというもの。発達障害の人の場合、平均的な子どもとは違うところに「発達の最近接領域」がある。今ここでそれを教えるのは、その子にとっての「発達の最近接領域」ではないかもしれないという発想が常に必要。

自分ができないと思った時に拒否する権利、できないと思った時に人に相談をすることを教えるために、大人の側が持つべき発想は、「合意」である。子どもに提案をして、合意形成を取るというスタンスを絶対に持っておく必要がある。

逆に、子どもの自発性に任せたいと思う人がいて、一切何も注意しない人がいるが、それも良くない。まだ子どもなので、判断ミスがたくさんある。自由にしていっていいと言われたのに、判断ミスしたときにだめと言われると混乱する。

また、人間は、人から声をかけてもらうのが嬉しいという気持ちがある。こちらが頼んでもいないのに、向こうから楽しい提案をしてくれる相手をもっと信頼する。提案と合意形成と言うプロセスの中では、大人がリーダーシップを取って子どもに声をかける。これは、年齢が小さいうちに丁寧にやっていく必要がある。

自閉症の人の場合、目から入る情報が重要なので、よく指摘されるのが「視覚的構造化」である。特に文字がまだ十分に読めないような年齢の低い子とか重度の知的障害がある人の場合には、写真とか絵とかをふんだんに使った情報の構造化を図る。構造化を併用しながら子どもの意見を聞くというスタンスを持つことで、相談の初歩が身につく。この「視覚的構造化」は、子どもが相談するという態度を形成するのに、ものすごく重要な役割を果たしている。ある程度年齢が大きくなり、もう少し読めるようになってきたら、字を使ってルールを教えることを考える。こうやって社会のルールを子どもに身につけさせながら、相談をするという習慣を育てていく。ポイントは、学齢期までは大人側がリードを取るということ。大人がリードを取り、子どもはそれを聞きながら、情報を十分に受け取ったうえで、自分で判断することを練習していく。



## ◆ 2 思春期 ◆

発達障害の人たちに物心がつくと思われる時期が思春期。物心がつくというのは、自分のことがよくわかって、周りが見えてくること。

発達障害の人で大人になった人は「小学生ぐらいまでは自己中心的で周りのものがあまり見えていなかった。中学から高校ぐらいにかけて、結構周りが見えてきて、人のことも配慮するようになってきた」と言う。思春期より前は、人に配慮するという意識していない。思春期を越えると、人一倍考えるようになるので、そういうことをよく考えているということをも前提にした支援をやっていく必要がある。



思春期を越えてくると、大人のリードばかりだと子どもから不満が出てくる。思春期から成人期にかけて、本人を支援する一番大事なことは、本人の「試行錯誤」を尊重すること。試行錯誤する中で自分の道が見えてくるもの。大人の役割は、それを片側から支えるということ。「支援つき試行錯誤」と表現する。周りの大人は複数の方針がありうることをいつも念頭に置き、対応することが大切。そういう時に方針が変わったからと言って、絶対に責めてはいけない。

## ◆ 3 成人期 ◆



発達障害の人がうまく社会に出て行けるかどうかということを見ると、自立スキルとソーシャルスキルが一番大事である。

一つ目は複数の活動拠点を持っているかどうか。特に趣味で、外でやれる趣味を持っているかどうか。二つ目は自分でできることをやるということ。三つ目は家庭内で自分の役割を担おうとする意欲があるかどうか。主として家事とか。四つ目は相談相手がいるかどうか。

大人になった発達障害の人たちは、かなり個性が様々であるが、本人にわかるように、こちらの情報を伝えられるかどうかということがすべてである。思春期以降の人たちと接するときは、いきなり助言はせず、よほど向こうがこちらの意見を求めていると思った時だけは言う。基本的には相手の話を聞くということ、相手が自分で考えるのに必要な情報を提供するというにとどめる。

今の日本の就労支援は、知的障害がメインとなっている。一般の人がやる仕事が難しいことだとすると、知的障害の人にはやさしい仕事をやってもらうという枠組みで作られていることが多い。ところが発達障害の人は、やさしい仕事は少し物足りないと感じることがある。ある能力は高いけど、別の能力はものすごく低いみたいな凸凹が激しい人が多いため、高い能力がうまく活かせるような仕事につくことは簡単ではない。この人たちの高い能力のというのは、インターネットとかパソコン能力だったりするが、発達障害の人を雇わなくてもパソコン能力を持っている優秀な人というのは世の中にたくさんいるので、簡単にいかない。さらにややくおしいのは、高い能力がだからといって興味があるという保証はないということ。だいたいは興味があるから能力が高い場合が多いが、そうとも限らない。もう少し厄介なのは、自分がそんなに能力が高くないことを仕事としてやりたいと希望すること。その場合、本人が望む職業につけないことが多い。発達障害が凸凹していると、どこに照準を合わせて仕事を考えて行けばいいのかということが意外と難しい。これは本人の努力というより、受け入れてくれる会社の問題でもある。学校にとって、発達障害の人は、ある意味、お金を払ってもらっているお客さまと言えるが、会社は、発達障害の人を雇ったら、お客さんではなくて従業員である。そこに、お金をもらって配慮する相手なのか、お金を払って、しかも配慮しなければいけない相手なのかという違いがある。その点を親が理解しておく必要がある。運よく就職した人が持っている持ち味が、その会社にとってメリットがある時は、仕事が成り立つ。その場合でも、例えばこの仕事はできるけれども、その仕事はできないみたいなことがある。それへの対応は、社風に関わってくる。「得意なことは活かすけど、苦手なことはしょうがない」という文化がその会社にどれだけあるかによって、発達障害の人の働きやすさが決まる。発達障害の人の雇用（一般的には障害者就労と言う）を、考えた時、適材適所という考え方やお互い様という考え方が、今の日本の会社の中にどれだけ浸透できるかがカギになる。今、正直厳しい状況である。みんな考えて、もう少し発達障害の人が働きやすいような会社を作っていくという意識を持って行く必要がある。そうでないと日本という国はつぶれるぐらいの考え方でやっていかないと厳しい状況である。



## いのちの学習「たった一つの宝もの」 韮崎東中学校



9月28日（金），韮崎東中学校の3年生を対象に，山梨県助産師会の助産師の方々を講師に迎え，様々な視点から「いのち」を巡る学習会が始まりました。もし，大切な人がこの世からいなくなったら…という想定で，かけがえのない「いのち」について考えるきっかけが与えられました。続いて，自分たちの祖父母，両親がいて，今の自分たちがここにいるという「いのち」の繋がりが確認されました。

新しい「いのち」についての学習では，事前に生徒一人ひとりに小さな折り紙と一粒の豆が手渡されていました。折り紙の中心に開けられた針の先ほどの小さな穴は，芽生えたばかりの「いのち」の大きさを，一粒の豆は妊娠40日目の胎児の大きさをそれぞれ表しており，「いのち」の始まりをイメージするヒントになりました。3～10ヶ月の胎児の人形を抱っこする体験では，「いのち」の重さを肌で感じました。また，細いストローを使って大きく息を吸い込むことで，赤ちゃんが産声を上げる直前に，息を一生懸命に吸い込む瞬間を疑似体験しました。

終わりに，かけがえのない新しい「いのち」のために，自分の身体と心を大切にするようにとのアドバイスがありました。「いのち」を授かって親になった時，赤ちゃんを育てる環境が十分整えられるよう，将来の夢や進路についてしっかりと考えて行動してほしいと期待が込められました。

最後に講師の提案で，生徒全員が自分自身に向けて大きな声で「たった一つの宝もの」という言葉を贈りました。この言葉は，それぞれの心に深く響いたことでしょう。



## 「フェスタ東ヶ丘2018」でブラスバンド演奏 穂坂小学校



10月21日（日），韮崎東ヶ丘病院にて「フェスタ東ヶ丘2018」が開催され，プログラムの最初の演目として，韮崎市立穂坂小学校6年生15名によるブラスバンド演奏が披露されました。この演奏は今年で16年目を迎え，参加した児童の保護者の中にもここで演奏した経験を持つ方がいるほどの伝統的な催しになっています。同校は，県の「いきいき教育地域人材活用推進事業」を通じて講師をお招きし，演奏の指導を受けており，練習の成果を発揮する良い機会となりました。また，同校は，韮崎市から「福祉のこころ醸成事業」の指定も受けており，児童たちの「福祉のこころ」に火をつける良い契機にもなりました。

1曲目の「校歌」に続いて，各パートによる楽器紹介では，児童たちがそれぞれの楽器の魅力について演奏を交えて，熱く語りました。演奏の最後を飾る『威風堂々』では，文字通り「堂々」とした演奏で会場を大いに沸かせ，喝采を浴びました。演奏を終え，児童会長の伊藤野乃果さんは，「練習の時よりも上手に演奏できました。ひとりで演奏するよりも，みんなで演奏することで，より大きな達成感を味わうことができました！」と，充実したひとときを振り返っていました。



## 第32回 勸学院祭 開催 山梨ことぶき勸学院

10月23日（火）、コラニー文化ホールにおいて第32回勸学院祭が行われました。甲府、中北をはじめ、峡南、峡東、北都留、南都留の各教室と卒業生（ことぶき朗読の会）の発表がありました。この日に向けて勸学院生は夏頃から準備を始め、何回も練習を重ねてきました。その中で、仲間との絆も強まり、どの発表も見応え・聴き応えのある完成度の高いものになりました。趣向を凝らしたエネルギッシュな発表に、こちらも元気をいただきました。最後に、異世代交流として、甲府一高箏曲部生徒の指導により、勸学院生が琴の演奏を体験するコーナーが設けられました。ここでも果敢にチャレンジする勸学院生の姿が見られました。

<発表内容>

甲府教室 2年：合唱「夢で逢いましょう」「おさななじみ」「遠くへ行きたい」「上を向いて歩こう」

1年：合唱「翼をください」「青春時代」「川の流れのように」「皆の衆」

中北教室 2年：踊り・合唱「きよしのズンドコ節」「スクラム」

1年：踊り「南中ソーラン節」



甲府教室2年



甲府教室1年



中北教室2年



中北教室1年

## 「音楽を通して見えたもの」 須玉小学校

10月25日（木）、北杜市立須玉小学校6年生を対象に、今年度2回目となる「JICA出前講座」が実施されました。今回は、青年海外協力隊員としてアフリカのザンビアに渡り、音楽教師としてボランティア活動に従事した三井麻友子氏（現在は南アルプス子どもの村小学校勤務）が講師を務めました。前半は、勤務していたセント・フランシス・セカンダリースクール（中高生が通う公立のミッション系男子校）で、活動停止に追い込まれたブラスバンド部を全国1位の部へと導いた体験談が語られ、後半では、児童がこの日のために練習を重ねてきた『Oh Happy Day』の英語合唱が披露された後、同氏による歌唱指導が行われました。

お話の中で、同氏が「音楽を通して見えたもの」として、「一生懸命努力すれば、周囲の人は必ず理解を示してくれる」、「音楽を合奏するためには他の奏者と協調する必要があり、そうすることで人は成長できる」という貴重な体験が語られ、子どもたちは熱心に耳を傾けていました。また、歌唱指導では、「喉を開けて歌うことを意識する」、「視線は上、顔は正面を向き、表情は明るく」などの具体的なアドバイスで、子どもたちの合唱はますます力強いものになっていきました。講座後、「音楽は国を問わず大切なもの」、「合唱の練習をもっとしたくなった」と感想を述べる子どもたちを見て、音楽が持つ力を改めて感じました。



ザンビアのプリント生地「チテンゲ」を使用した民族衣装を着る講師。色・柄はザンビア国旗がモチーフ。



## 地域との交流 ①・② 甲府支援学校

### ①「甲養祭」で祭り囃子(ばやし)セッション



10月6日(土), 甲府支援学校の学園祭「甲養祭」が開催されました。これまで、全校生徒と地域との交流として、地元の「池田おやなぎ連」の皆さんによるお囃子(はやし)が披露されてきましたが、昨年度に引き続き今年度も、中学部の生徒と「おやなぎ連」の皆さんによるセッションが行われました。一昨年から音楽の授業に太鼓が取り入れられ、日頃の練習の成果を発表する場として、この合奏が実現したそうです。曲目は秋の豊作を祝う文部省唱歌『村祭り』で、稲刈りが盛んなこの時期にピッタリの曲となりました。



12名の生徒は法被(はっぴ)を身にまとい、丸胴太鼓、締太鼓、手持ちの平太鼓にチャレンジし、軽快なリズムを奏でていました。「頑張りました!」、「一生懸命練習してきたので、うまくできて良かったです!」と演奏後の感想を語る生徒の表情は、一つのことを成し遂げた喜びに溢れていました。会場となった体育館には文字どおり「ドンドンヒャララドンヒャララ」と太鼓や笛の音が響き渡り、演奏する側も聴く側も、心躍る楽しいひとときとなりました。最後はアンコールの声も掛かり、会場は大いに盛り上がりました。

### ②「ほうとう会」



11月13日(火), 甲府支援学校多目的室を会場に、中学部生徒23名と地元の池田地区老人クラブ連合会女性部の方々との地域交流の集い「ほうとう会」が催されました。この行事には既に30年ほどの歴史があるそうです。

2回の事前学習では、会の流れの確認、ほうとうに関する調べ学習、グループごとの顔合わせなどが行われた後、作業の具体的な手順などを学んで、この日を迎えました。生徒は、女性部の方々の熟練した技をお手本にしながら、ひとり一人が真剣に麺作りに取り組んでいました。



力強く小麦粉をこね、器用に麺棒で生地を伸ばし、丁寧に包丁を入れていく生徒の姿が大変印象的でした。会場のあちろちろから励ましの声や拍手が沸き上がり、明るく和やかな雰囲気の中で麺が出来上がりました。

この後は、生徒と女性部の方々との「ふれあい活動」として、手遊びや学園祭のビデオ鑑賞が行われました。そして、いよいよ試食の時間となりました。自分で打った麺と、今が旬のカボチャが入った手作りほうとうに、身体も心も温まる、思い出深い一日となりました。